

## 動詞連続構文に関する構文文法的考察

### 1. 導入

本研究では、Goldberg (1995)や Boas (2001)などで提唱されている構文文法の枠組みから Goldberg (2006: 50-52)で扱われている以下のような文について考察する。

(1) The toddler went screaming down the street. (Goldberg 2006: 50)

この構文は、-ing 形という非定形の動詞 (V2) が定形の動詞 (V1) に後続するという特徴から、Goldberg (2006)では Serial Verb Construction (動詞連続構文) と呼ばれている。しかし、Goldberg による動詞連続構文の分析は (i) V1 と V2 の組み合わせに関する制約や (ii) プロトタイプの意味に関する考察が十分ではない。

本研究では、Goldberg (2006)で挙げられている動詞連続構文を、Wordbanks Online という約 5,000 万語の大規模コーパスを用いて数量的に分析にする。このような分析によって (i) V1 と V2 の組み合わせに関する制約や (ii) 動詞連続構文のプロトタイプの意味が明らかになるだけでなく (iii) 構文文法の枠組みによる動詞連続構文の分析が妥当なものであることを議論する。

### 2. 先行研究

Goldberg は、動詞連続構文が分詞構文とは異なるものであることを示すために以下のような統語テストを行っている。

(2) a. Bill went down the street whistling a tune.

b. \*Bill went whistling a tune down the street. (ibid.: 51)

分詞構文である (2a) では、従属節内部の動詞である *whistling* が *a tune* という項を取ることが出来るのに対して、動詞連続構文である (2b) では、*whistling* は *a tune* という項を取ることが出来ない。V2 が項を取ることが出来ないという制約は、分詞構文には無い動詞連続構文に特有の制約であることから、動詞連続構文は分詞構文とは別の構文であると主張されている。

さらに、Goldberg は V1 と V2 の組み合わせに関して、V1 には *come, go, run* そして *take off* しか現れないということと、V2 は生産性が高く様々な動詞が入るということを挙げているのみである。しかし、これだけでは分詞構文との違いは明らかではない。

### 3. 結果

本研究では 684 例の動詞連続構文を Wordbanks Online から見つけ出し、それらの具体

例から動詞連続構文の意味的な制約を明らかにした。

まず、V1 についてコーパスの結果を示す。684 例のうち V1 には *go* や *come* といった直示的移動動詞が 646 例ある一方で、*walk* や *run* といった移動の様態を表わす移動様態動詞は 38 例のみであった。さらに直示的移動動詞についても、全 646 例の中に無標な *go* は 183 例のみだが、有標な *come* が 463 例と *go* の約 2.5 倍も見つかった(cf. Fillmore 1997)。

次に、V2 に関するコーパスの結果を示す。V2 には *running* のような移動の様態を表わす移動様態動詞と *whistling* のような移動の付帯状況を表わす活動動詞が現れる。Wordbanks Online で見つかった動詞連続構文 684 例のうち、移動様態動詞が 536 例見つかったのに対して活動動詞は 148 例しかなく、V2 には移動の様態を表わす移動様態動詞が現れやすいという性質が明らかになった。

これまで見てきたコーパス調査から明らかになった V1 と V2 の性質を表 1 に示す。V1 が *go* のような直示動詞である場合は V2 に *running* のような移動様態動詞が現れやすく、V1 が *run* のような移動様態動詞である場合は V2 に *screaming* のような活動動詞が現れやすいということが統計的に明らかになった。

V1 \ V2	移動様態動詞	活動動詞	合計
直示動詞	<u>532</u>	<u>114</u>	646
移動様態動詞	<u>4</u>	<u>34</u>	38
合計	536	148	684

$$\chi^2=105.003, df=1, p < 0.001$$

#### 4. 考察

以下では、動詞連続構文に上で見たような意味的な制約が存在する理由や、動詞連続構文を構文文法の枠組みから分析する意義について議論する。

1 つの節（単文）で表わされる事象は、1 つの事象として認識されていると言われている (Croft 1991, Talmy 2000 など)。言い換えると、単文である動詞連続構文において、移動様態動詞が直示動詞と共起しやすいということは、直示性という性質と移動の様態が 1 つの事象として認識されやすいということになる。また、直示動詞が活動動詞と共起するパターンと非直示動詞が移動動詞と共起するパターンが現れにくいのは、直示性という性質と移動の付帯状況の関連性が低いことを反映している。さらに、移動様態動詞が移動様

態動詞と共起しにくいのは、単一の移動事象の中で 2 つ以上の移動の様態は同時に現れにくい、という物理的制約を反映している。

また、直示動詞の中で有標である *come* が *go* よりも多い理由は、動詞連続構文の V2 にどのような動詞が現れやすいかということと関係がある。動詞連続構文の V2 には *running* や *rafting* など比較的特殊な動詞が現れやすい<sup>1</sup>。このことから典型例は、直示性と様態という 2 つの性質が共に有標な場合だと言える。この構文が、1 つの動詞だけでは十分に表現出来ないイベントを表わす場合に用いられやすい構文だと考えれば、V1 も V2 も共に有標な動詞が現れやすいことも説明出来る。

最後に、動詞連続構文を構文文法の枠組みから分析することの妥当性について述べる。動詞連続構文にはある動詞が別のある動詞と結びつきやすい性質があることを見てきたが、このような性質が個々の動詞ごとに予め決まっているとは考えにくい。つまり、このような性質は個々の動詞によるものではなく、構文が独自に持っている性質であると考える必要があり、動詞連続構文を構文文法の枠組みによって分析することは妥当である。

## 参考文献

- Boas, Hans Cristian. 2003. *A Constructional Approach to Resultatives*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Croft, William Albert. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations: The Cognitive Organization of Information*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fillmore, Charles John. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- . 2006. *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Stefanowitsch, Anatol and Stefan Th. Gries. 2003. Collostructions: Investigating the Interaction between Words and Constructions. *International Journal of Corpus Linguistics* 8: 2, 209-243.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics*. Cambridge, MA: MIT Press.

---

<sup>1</sup> Stefanowitsch and Gries (2003)での Collostruction Strength という概念を動詞連続構文に適用した結果から明らかになった。